

立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）

個人研究

2024年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局・職名	氏名
	異文化コミュニケーション学部・教授	河合優子
研究課題	日本の東アジア植民地支配の文化的忘却と大河ドラマ	
研究期間	2024年度	
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 469,989円 / (採択金額) 470,000円	
研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと。)		
当該研究の研究目的を含むこと。 【以下、報告書全体について】他の研究分野の委員が評価することも想定し、わかりやすく記載すること。		
<p>本研究の目的は2010年代以降に放送された大河ドラマで、日本の東アジア植民地支配の過去がどのように忘却されているのかを分析することである。日本と東アジアの人々との共生にとって、日本の植民地支配の文化的記憶のあり方が一つの課題だが、初等・中等教育で十分に教えられておらず、テレビドラマなど大衆文化でも西洋との関係性が詳細に描かれる一方で、植民地支配を行った東アジアとの関係性は十分に描かれないことが多い。本研究は文化的記憶や集合的記憶として記憶を社会的行為として捉えた研究、歴史研究、メディア研究など複数の学術的知見を活用し、大河ドラマにおける日本の東アジア植民地支配の文化的忘却を考察することで、東アジアの人々との関係構築のための日本の植民地支配の記憶のあり方を模索する。</p>		

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[文化的記憶] [想起と忘却] [大河ドラマ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか (できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果 (経過) を達成できた (できなかった) と考えられるのか
自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。
- ・どのような点において、当該研究分野の学術研究推進の高度化に寄与できたのか。

本研究の目的は 2010 年代以降に放送された大河ドラマにおいて日本の東アジア植民地支配がどのように忘却されているのか、つまり文化的忘却を分析することである。記憶は想起と忘却が絡まってつくられるが、文化的記憶研究ではこれまで想起の側面が注目されてきた。しかし忘却が原則であり想起は例外 (A. Assmann 2010) と言われるように記憶における忘却の重要度は高いが、その概念的議論は非常に少ないのが現状である (Plate 2016)。

1963 年に放送が開始された大河ドラマ全 64 作品 (1993 年は 2 作品) において、明治維新以降の近代を描いた作品が登場するのは 1980 年代からである。大河ドラマは戦国時代を描いた「戦国物」が多い反面、近代を描いたものは少なく、明治維新以降の時期が含まれる作品であっても明治前半までということも多い。近代を描いた作品は 1980 年代と 2010 年代以降に集中している。SFR の研究計画では、分析対象を 2010 年代以降の作品に絞った。

メディア表象は何を表象するのかが常に選択され、表象されないものは無数に存在するため、単に忘却イコール表象されないものとするとはできない。よって本研究ではエドワード・サイード (1998) の対位法的読解と心理学分野の記憶研究で使われてきた検索誘発性忘却 (RIF: retrieval-induced forgetting) (例えば、Stone, Gkinopoulos & Hirst 2017) という概念を組み合わせて分析的枠組みとして使用した。対位法的読解とは文化的テキストをその背景の歴史的状況と結びつけて読み解く方法である。RIF とはあるカテゴリーの要素を積極的に想起しようとする、別のカテゴリーの要素よりも同じカテゴリーの別要素を思い出すことが難しくなるという現象を指す概念である。この概念が示すのは、忘却と想起は別々のプロセスではなく、絡み合っていることである。本研究では、大河ドラマで描かれる日本の近代に、対位法的読解でその時代の日本の東アジア植民地支配に関わる歴史的状況を対置させて読み解き、RIF という概念を参考にしつつ、作品で何を表象することで、それに関連する何が表象されていないのかを分析した。

昭和期までを描いている『いだてん』(2019 年放送) と『青天を衝け』(2021 年放送) の分析を行い、メモリースタディーズ学会第 8 回年次大会で研究発表を行った。RIF は心理学的現象を示す概念であり、それをメディア表象の分析に応用可能かどうかは課題の一つであった。今後、詳細な議論を行う必要があるが、この二作品を対位法的読解と RIF を用いての分析を試みた結果、RIF はメディア表象の分析的枠組みとしても応用できるという感触を得た。RIF は個人の記憶プロセスで確認されているだけでなく (個人内 RIF WI-RIF: within-individual retrieval-induced forgetting)、複数の個人が関わる記憶プロセスでも確認されており (例: 話し手が想起した事柄に対し、聞き手がこの事柄に関連する何かを忘却する)、社会共有的 RIF (SS-RIF: socially shared retrieval-induced forgetting) と呼ばれる。個人内 RIF と社会共有的 RIF は、単語、フィクション、人生経験、医療情報、政治的事件など多様な事柄を記憶するプロセスで確認されている。RIF は心理学的概念であり、個人や個人間を対象とした実験データに基づいて研究されてきた。記憶研究で、個人の記憶の総体以上のものを、集合的記憶や文化的記憶など社会的行為として捉えた研究が蓄積されてきたように、社会共有的 RIF の「社会」も個人間というマイクロレベルではなく、マクロレベルの社会的行為としても捉えることができるのではないかと。

上記二作品の主な分析結果の一つが、日本の近代を欧米との関係を中心に想起することで、これとコインの裏表のような関係にある東アジアとの関係が忘却され、それによって弱者/被害者としての日本の想起と強者/加害者としての日本の忘却につながっているという点である。その背景には、明治期以降の日本の近代を主に欧米との関係を軸にして理解する、という日本社会における一般的な歴史認識のあり方が関係している。日本の近代を欧米との関係を軸に表象することで、日本を政治、経済、技術、軍事、文化などの面で圧倒的な力を持つ存在としての欧米 (=強者) に対する弱者、そのような欧米による不平等条約や植民地支配の可能性を突き付けられる被害者として描くことにつながり、東アジアに対して不平等条約を突き付け、植民地支配を行う強者/加害者であったことが忘却される。欧米との関係を想起することで、それと同等もしくはそれ以上に緊密な関係を持っていた東アジアとの関係が忘却される。

研究成果の概要 (つづき)

例えば、『青天を衝け』の主人公渋沢栄一は、中国や朝鮮半島での事業にも積極的に関わった人物であり、現地への訪問も複数回行っている。しかしそれは表象されることなく、パリ万国博覧会の使節団としてのフランス訪問やアメリカ訪問は複数話をかけて詳細に描かれる。渋沢は、朝鮮半島で鉄道、銀行、ガス、電力など主要な事業に携わり、1898年には大韓帝国皇帝・高宗と会見し、1905年には高宗から勲一等太極章を授与されているが、それらについては言及されず、描写もされない。一方、1902年のアメリカのセオドア・ルーズベルト大統領、1909年のタフト大統領との会見は、両大統領をドラマに登場させて描写し、1879年に元アメリカ大統領・グラント将軍が来日した時のエピソードは一話分使って詳細に描く。

この二作品のドラマは日本の近代を欧米との関係を中心に表象し、東アジアとの関係が不可視化されているため、東アジア植民地における日本人による現地の人々への差別や独立運動弾圧などの加害も表象されない。しかし、それに関連する別の事柄、アメリカ白人による日系移民に対する差別は詳細に描くという共通点があった。『いだてん』では主人公の田畑政治が水泳日本代表の監督として参加した1932年のロサンゼルスオリンピック、『青天を衝け』では主人公の渋沢栄一の1909年の三か月のアメリカ視察旅行を描く際に、当時の新聞記事や映像も使用してフィクションではなく歴史的事実であることを強調し、日系移民のキャラクターも登場させて彼・彼女らに対する人種差別を詳細に描いている。アジア太平洋戦争のメディア表象で、原爆や空襲などで一般の日本人が被った被害を強調する傾向、「被害者意識ナショナリズム (victimhood nationalism)」(Lim 2010) についてはさまざまな研究者が主張してきたことである。アジア太平洋戦争以前の日本の近代を欧米との関係を軸に表象する際、弱者／被害者としての日本は国家レベルとなり、日露戦争による一般の人々の被害が描かれたとしても国外で行われた戦争であり勝利した戦争であることから、老若男女を問わず幅広い一般の人々を被害者として表象するのは難しい。大衆文化であるテレビ番組は、多数で多様なオーディエンスの共感を引き起こして惹きつける必要があるが、そのために有用な方法の一つが一般の人々の被害を描くことだろう。日本の近代を欧米との関係を中心に表象することが、一般の人々のレベルでの弱者／被害者を具体化したものとしてアメリカでの日系移民の被害を想起することにつながり、東アジアとの関係が表象されないことが、日本人の被植民者に対する加害を忘却することにつながっているのではないだろうか。

当初の予定ではこの二作品のほか、「幕末物」ではあるが明治期前半についても描いている『八重の桜』(2013年放送)、『花燃ゆ』(2015年放送)、『西郷どん』(2018年放送)も分析の対象とし論文を執筆する予定であったが、まだ分析途中である。理由は、大河ドラマにおけるアメリカの日系移民への人種差別の被害の想起に注目し、映像が現存しDVD等でアクセス可能な1970年代から2024年までに制作された日系人を主人公にした連続ドラマ(単発ものは除く)の分析を含めた論文を執筆していたためである。この論文はRoutledge社から出版されるアジアのディアスポラとナショナリズムに関するハンドブック(出版契約済)に収録される予定で、第一稿を提出し、現在、編集者からのコメント待ちである。データとして使用した連続ドラマには1984年に放送された大河ドラマ作品(『山河燃ゆ』)が含まれ、今後、学会発表を行った二作品の分析に加えて上記三作品を含めた分析、そして1980年代の日本の近代を描いた大河ドラマの分析に、この論文を執筆したことが役立つのではないかと思う。

今回のSFR研究期間での成果は、文化的忘却の分析的枠組みとして対位法的読解とRIFを併用することは有効であるという感触が得られた点である。しかし未達成の部分は、詳細な概念的議論はまだこれからである点であり、今後、記憶研究における集合的記憶や文化的記憶など社会的行為としての記憶の議論を参照しつつ取り組む予定である。SFR期間では完成できなかった2010年代以降の作品の総合的な分析、さらに1980年代の作品で大河ドラマにおける日本の東アジア植民地支配がどのように忘却されているのかについての研究を進め、文化的忘却の概念的議論を深めることで、記憶研究と筆者の専門領域である異文化コミュニケーション研究分野での学術研究推進の高度化への寄与を目指したい。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

Kawai, Yuko. (2024, July 19). *Cultural forgetting of Japan's colonial rules in Asia: An analysis of Japanese public broadcaster's annual historical drama series*. Paper presented in the 8th Annual Conference of Memory Studies Association. Pontificia Universidad Católica del Perú, Lima, Peru.